



2020
7月

園だより

認定こども園 下関短期大学付属第二幼稚園
山口県下関市彦島塩浜町2丁目2-21 ☎ 083(266)5821

虫に夢虫（中）

新入園児もすっかり園に慣れてきました。戸外遊びの時には、みんな顔を真っ赤にして遊びに夢中になっています。中にはカニや虫さがしに没頭している子もいます。

本園は、豊かな自然に囲まれているため、野鳥はもちろん生き物がたくさんいます。ケムシやムカデのような危険な虫もありますが、子どもに人気の虫もたくさんいます。カニ、セミ、バッタ、カマキリ、カタツムリ、ダンゴムシ、カブトムシ、クワガタ…。先日はプールにいたたくさんのオタマジャクシを教員がたらいに移し、みんなでその成長を見守りました。



工藤直子「のはらうた」より

子どもは虫が大好きです。幼児期の子どもは、虫そのものというより、虫を追い、捕まえること自体を楽しみます。捕った虫をどうするかより、まずそれに触ってみたい、遊びたい、そして自慢したいというのが目的のすべて。捕まえた虫はおもちゃと全く同格で、死んで動かなくなったものは壊れたおもちゃと同じ。でも実はそれが自然な姿です。残酷のように見えますが、幼児期は、脳の発達上自己中心的なとらえ方しかできません。虫がかわいそうとかいった感情が芽生えるのは、年長から小学生になってからだと言います。むしろ幼少期にしっかり生き物とかかわることが、命の尊さを深く理解する子に育つ基盤になるのでないでしょうか。

園ではカメを飼っていますが、子どもたちはおかまいなしに触りたがります。たらいのオタマジャクシも触って楽しみたがります。これも自然な姿です。元来子どもは何でも触ろうとするものです。乳児期から幼児期の子どもは、対象をとらえるとき、見るよりも触る方が確かめやすいと言われています。手だけではありません。唇を使って確かめることもあります。「赤ちゃんはスリッパの裏をなめても平気」（堀内勲著 ダイアモンド社）は、その奇抜なタイトルでちょっとした話題になりました。著者は、微生物の巣であるおもちゃやスリッパをなめても、それが原因で感染症にならないのは、母乳によって赤ちゃんの体内に蓄えられた乳酸菌のおかげだと説明しています。

ところで、一般的に虫は汚いと思われがちです。でも、子どもの手の方がはるかに細菌が多いそうです。もっとも、最近は新型コロナウイルス対策で、子どもたちも手をこまめに洗っていますが、虫の方が案外清潔なのだそうです。虫に言わせれば、「汚い手で触らないで」というところでしょうか。（ゴキブリやハエなどの衛生害虫は例外です。）

アンリ・ファブルは、「虫という最も小さなものに最大の驚きが隠されている。」と言い残しています。虫に触れることにより、不思議の世界への扉が開かれ、そこから探究心が生まれ、科学する目と命の神秘を敬う心が育っていきます。ノーベル賞を受賞した福井謙一、小柴昌俊、白川英樹博士たちはかつては昆虫少年だったそうです。もっとも、虫への興味には個人差がありますので、すべての子どもというわけではありません。

ただ、追いかけるのに夢中になるあまり周囲が見えなくなるのも子どもの特性で、道路の飛び出し、川や用水路での水難事故など、実は危険と隣り合わせです。園の山にも子どもが上がるときは、保護者も必ず同伴をお願いします。園内の道路や駐車場も同様です。遊んでよい所か遊んではいけない所かは教えてください。そして安全に虫捕りに興じてほしいですね。（園長 寺本 明生）